概要目録
第一部叙に代えて 1
第一章会釈 2
第一節差し当たって 3
第二節この小冊子について 3
第三節架空の謝辞（書きたいだけ） 3
第二部従来に対する言説 4
第一章従来理論形式の不完全性 5
第一節連想と推論を如何にして明晰に区分できるか 5
第二節総ての原理的体系は自己自身一般の真理に達するか 5
第三節二元論は崩壊しているか 5
第四節何が彼らからパラノイアを奪ったか、或いは公理系の水平性 5
第五節意識されるもの以外存在しないという凡そ先験的な観念 5
第六節努められるとき何が起こるか 6
第二章酩酊の弁証法 6
第一節酩酊の狂気なしには如何なる台架も存在しない 6
第二節現代思想は狂気を覆う 6
第三章精神分析論、或いはラカン理論との接点 6
第四章 3
第三部精神構造論の述語 1
第一章エベラとはなにか 3
第二章猜疑の論議 2
第三章マティエールとアイデ、或いはそれらの原理3 3
3

第四部状態性のまどろみ 1
第一章マクロな優越の理論 3
第一節通行性と自己や他者 2
第二節優界と劣界 2
第二章情緒について 2
第一節従来エベラの情緒論の問題点 2 第二節リアリティの問題、マティエール 2
第三節不可分な条理性 2
第三章レピュテ 3
3
3
第五部架空のセミネール 1
第一章オスロ編 3

第一部叙に代えて

第一章会釈
第一節差し当たって
ごきげんよう。といっても、相当する相槌を打たれることはおろか、認識さえされないに違いない。かといって、これによって心的威力を受けることもない、私は書くことを純粋に喜んでいる。さあ、読者諸君。君たちは様々な場所において、色々な人間の論説や講演を聞いた。そして、動物性の緊迫した触覚が、気違いじみた様子で流れてくる。その理由は、彼ら雄弁家の明らかな不誠実、便宜のみを支えた独断である。彼らは、如何なる場合においても、ある種の酩酊に陶酔しており、生真面目に相当の敬意を以て行動しなければ学問の腐敗を生むだけだと発言

する時にさえ、彼らの真の目的といえば、自己の保身、或いは女性からの賞嘆ばかり。かつての知的好奇心の意義とはすっかり決別し、あいつのいうところを如何に打ち負かしてやるか、などと言った圧倒的な劣悪の動機。時に、科学的な宇宙論は詩性の論理と相反していて、またそれらは他方から一方へと通行的な被害を与えていて、それというのも詩の美しさが、機械論的法則によってただ必然に動かされているのみという科学的思考によって汚されると訴えた。これは、科学の権威性を人間の意識の面から立証しているが、さればとて正当性の有無は試論が検証するだけだ。ともかく、美と機械が対立するのは異常である。私の理論について一言申せば、凡そ幾分か神聖であり、然るに「美」自体を解説する。確かに、王者的法則は沼っぽいかもしれないが、しかし根本の真理にまで到達すれば、全く無理なく自然に、美女の真理へと導かれるのも、或いは王者的法則である。さて、この論説が何を本当に意図しているかは、まだ分かるまい。この論説、或いはこの小冊子は女性から多くを負っている。それはある特定の女性なのではない。本小冊子が、のちに見られるように意味不明に、重要な理解に不可分な部分のみが検閲されている惨状を可能にし、或いは私にこの惨状を真似て本文を書かせたのは、専ら彼女らである。これは彼女らへの呵責なのではない。よりむしろ、人間の支配的心理を描き出すに充分な詩的論理の筋道を、示唆的にでも示したのは、それらの人だ。さあ、私が女であったなら（女であったなら、という仮定からして私は男である）、その逆もありえた。即ち、男から多くを負って、女性にありがちな優しさと感激によって似たレポートを書いたかもしれない。
「差し当たって」、私が言うところは大それた騒ぎの只中において、どさくさに紛れて放った発言に似た環境なのである。もしも私がもう一人存在したなら、彼に向かってあれやこれやというだけで直示できたのだが、何事も想定されていなければ了解できない他者からすれば如何に困難な状況か。如何にも、ロックのライヴで見知らぬ隣人に小声で訴える場合にほとんど等しい。まどろみにあって、仮象の論理を選り分ける仕事に等しい。これを改善するための努力を、私はしたことがあるが、それも虚しい仕事であった。かといって、私はこの成果の報告を諦めるべきか？ここに彼女らの想像上の声援が飛ぶわけである。それか、ジョージ・オーウェルの充溢したパロールが飛んでくる、「しかし声を発している限り、何らかの人目につかない方法によってでも、真実の継続性は保たれる。他人に聞いてもらうことではなく、正気を保つことによってこそ、人類の遺産は継承されるのだ」と。ここに、本書の起源がある。率直に言えば、これを書く気にはどうしてもなれずにいた。しかしまあ、暗号はいつか解かれるであろう。私はこれを信じている。
いずれ語られることだが、人間的な認識の原理的限界においては自己自身一般の真理に到達するという、摩訶不思議な命題について一言しておこう。私は私の理論を、ある種の手記であると考えている、もっとも私の本当の手記よりはずっとましなものだが。それは、私が目撃した事柄の記録としての手記の概念を離れ、「未知の手記」を意味している。類なるヒューマニズムを語りたいわけではないが、この未知なる手記は幸福論、比較的倫理学的な命題を提示する。それは自己自身について物語る。なぜなれば、自己自身一般とは個別の自己自身のそれぞれに傾聴しつつ、彼らの個体的特質からある作用を持ち出したゆえに、自己一般論から具象的な人間像を導出するという過程に意味されている。私は他者とあまり関わってこなかったし、小説などは読む気にならなかったので、私自身以外の如何なる人間像もほとんど想像可能ではないが、作家や内面主義者らについても、切実に感じられるのは自己自身、或いは自己自身を模倣して描いたある登場人物なのであって、ここに上記の “作用の抽出”が現れている。ゆえに、機械論的操作が「美」とは交わるところを知らぬといったドグマは、かねてから芸術と論を離反してきた凶悪な嫉妬である。ゆえにまた、私の理論は詩情溢れて充分なのである。いずれ、粋な男の一挙手一投足に到るまでを分析する手立ても整うであろう。それはともかく、この理論は自己啓発の雑多な宣言よりも、自己についての有能な事情を語る。他の自己了解は、これに優れて完了されない。未だ、この理論は未完成であるが、大幅の訂正は不必要であると感じている、よって確定的な自己性格と自己幸福実現の方法を提供するに足ると私は信じて憚らない。
私はこの期間、しばしばある人と雑談に近き対話を続けていたが、その中からひとつの発想を得た。つまりそれは、符号化と自己、或いは

憧憬の口実についてである。ここでの符号化とは、通常の使用と相異なった意味だ。後に語られるはずだが、これは“難解性と表現する衝動” に対する謙虚さの生成を説明する。そこには自己に通ずる憧憬としての“優越”が存在する。予想だが、同性への憧憬は同一性、異性への憧憬は差異性に担保される。ところで憧憬の口実は、私がその人と緊密なラポルト（感情結合関係）を取り結べていないことが原因かもしれぬが、その人は自身の憧憬やその理由に最もらしい説明をあてがわざるを得ない。この心理は、情緒にアプローチする際大いに助けになった。その人は対話の中でこの事柄に接触したわけではなく、私の外部観察なのだが、私自身の友人の数少なさからしてこれが限界だ。幼児を研究するのは極めて本質的なはずで、私の関わりたい研究のひとつであるが、いやしかし幼児の親の持つパラノイア性特質はすさまじい。決して何かの恨みがあるわけでも、侮辱しているわけでもない。乳母の眠りは、格率的なラポルトである。私は子供がいないので知らないが。ところで、「既知」は改めて命名すべきほど、精神構造において迫真的である。ここに、フランス語の名称を付け加えてみよう、“レピュテ＝既知“である。後に語るが、”造語への抵抗”という純心理的観念が、レピュテに依存するのは自明である。また俗にいう“ネタバレ” はレピュテの作用であって、人々はこのあかしを恐れている。おそらくなぜなれば、というわけは以後の理論発展が解明する。のちの哲学的批判作業に向けて、造語への抵抗という「レピュテ依存症」に一言しなければならない。フェルディナン・ド・ソシュールの現代言語学は主著「一般言語学講義」として公表されたが、これは彼の忠実な弟子の努力、或いは若き聴講者のノートから成っているゆえ、師匠の考えをそのまま写像しているとは限らないが、一応現代言語学への批判としてである。私は言語の完全性は“未だ“存在しないと考えている。よって言語は現在不完全であり、人類の技巧的な工夫の産物であると信ずる。だから、言語名称目録観の否定は必然的で真正であると想われる。しかし、私は彼が言語の本質を差異の体系としたことに疑念を抱く。ラカンの言葉を借りれば、「言語は記号ではない」なる命題だが、この意味はつまりシニフィアンとシニフィエの結合の一義性の虚構性だ。さて、これから言わんとすることは、私の理論をよく吟味されてからの方がよいと想うが、それはシニフィアンとシニフィエの区別は認めよう、記号自体はアート的であって、聴覚映像である。これは自明なのだが、非一義性は” 言語“という機械的系の本質なのではなくて、これもまた人間の苦労と工夫の産物なのだ。人間の心理的特性（表にまとめよ）にはレピュテへの依存が存在するのは否定しがたい事実なのであって、現在既に”ある“ものを遣り繰りしようとする衝動は意識せねば抑圧できないであろう。ゆえに、シニフィアンの風船論は全く別の領域なのであろう。おっと、こうしては私は最初に描いた演説家のようになってしまう。ああ、総ての思想家はこの確信のまま死に、これが永劫回帰するのだろうか。私はその部分なのだろうか。しかし、それもいいではないか。いやよくない。ともかく、これでラカン理論への批判も連想される。それはこれからの叙述に期待。
さて、とりとめのない話をつらつらと書いているが、一旦これを打ち切ることにしよう。しかし、まとめようとはしない。それは無意味で
ある。

第二節この小冊子について

「状態性のまどろみ」というこの小冊子は、いくつかの前提を必要とする。先ずもって、「訥弁についての原理的背景と臨床的な諸事情」
という本、次に「精神構造論、痕跡と前表象」なる本の２つである。後者の著作は、本書においてかみ砕くための註釈を差し込むつもりだが、主要な内容は著作自体を参照願いたい。
さて、本書は第二部で哲学的なことをやってみようと想う。つまり、従来への批判である。この「純哲学的」作業でさえ、「従来純哲学
的」として過去化するのは如何にも、世紀を跨ぐような仕事と想われる。しかしながら、そうはいっても私の暴走を可視化することによってそれは可能になるであろう、さあ私の存在自体が画期的で卓越的だと自負しているわけではないが。差し当たって、この哲学的批判作業は、精神構造論の解釈と了解を必要とする。また私は読書をほとんどしないゆえに、史的な認識、即ち文脈的解釈が得意ではない。精神構造論は、イマ

ヌエル・カントの認識論などと対比され相違点を数えられた経緯を持つわけではないし、そういった努力は歴史家の養分であるから、と考えて放し飼いしていたが、近ごろ私はこの解釈を正そうとする。史的見地は、精神構造論の価値を説くのも、不完全性を説くのも、得意とする。それは歴史という流れのうちで住まうのではなく、重要なのだ。おっと、史性というのは、恰好のよいであろう？よって私は他の人物を引用したり、言及したりすることは少ない。だがジークムント・フロイトやジャック＝マリー・ラカンや、カール・グスタフ・ユングらは、僭越ながら私と同様に、人間心理の帝王に挑戦している偉大な同志たちであって、彼らの事業を前提として思考した際の利益に顧みることは例外的に多くあるであろう。つまるところは、本書では最も多く、彼らに批判の矛先が向くが、彼らを賞嘆する声もまた等量に加えたい。フロイトは、最初の著述で書いた、必要以上に雄弁な演説家とは善き意味で相反した、全くの誠実紳士的姿勢であったのだ。この態度は、人間心理に払うべき相当の敬意に値している。これにより、私の理論は必要な礼儀以上の礼儀を以て、何かを語ろうとする。また第二部第二章においては精神構造論のための方法論を準備する。

第三節架空の謝辞（書きたいだけ）

本書の成立に不可分であった私の２人の友人と、R教授に感謝する。友人のうちのひとりは、私と最も打ち解けた仲にある人で、本書の内容を了解してはいないものの、彼自身が感じた率直な意を表明してくれたため、本書の改善に役立てることができた。もう一方の友人は凡そ、私の心が透き通って見えるらしく、限りなく真の解釈を提示してくれた。R教授は、人間心理に対しての博識がこれ以上ない域に達されており、私の理論に本質的なあらゆる意見を教えてくださった。また、教授は精神分析家としてのもっとも迫真的な実践を体験されており、そのため私自身が到達したであろう結論を強化できた。我が親友２人と、教授の天才に改めて深甚なる謝意をここに表明する。

第二部従来に対する言説

第一章従来理論形式の不完全性

第一節 連想と推論を如何にして明晰に区分できるか

従来理論形式と発言することが、傲慢に値するだろうか。なるほど、私がこうして叙述を垂れることが可能なのは、或いは他ならぬ確信された思考基盤を以てものを考えることが可能なのは、私たちの先祖、先人の偉大な仕事に拠るのであって、現在の自己と先人を切断して、あたかも自己の専有物とする泥棒的な真似は、礼儀に反しているかもしれぬ。

第二節総ての原理的体系は自己自身一般の真理に達するか

本命題は純心理学的理論や脳科学や精神分析理論、精神療法などの心的論理に限らない。物理学や数学や哲学、社会学から料理論に到るまで、あらゆる抽象理論に適用される。だが、たとえば数学が永遠に自身の内に留まり続けようとせず、数の域を脱獄し、さらに普遍な領域から裏付けるというアクロバティックな動作を要請しはする。ゆえに、私たちの総ての学問体系はこの究極原則から流れ出てくる形成物に過ぎないのだが、こうして帰結することよりも、これらの形成物を探り当てる方が困難な作業である。逆に言えば、数学が人格者の内面を記述するようになった瞬間、私たちは数学が完全なる学問に発展したことを知るであろう。また、叙説で提言したが、“自己自身一般“に注目してほしい。それは原理的体系という客観的な事物が、それに関わる人間という主観的な性格を持ってくるのだ。といっても、学者の集団に対し、原理的体

系が特定の人間を語るというのではない。それは学者それぞれ自体なのである。想定されている確信、特有の誤謬傾向、欲望、それは自己に宿る魂である。

第三節二元論は崩壊しているか

セマンティカルな推論はこれを拒むが、シンタクティカルな連想はこれを親近感あるものと捉える、そうしたものが在るか？狭義脱構築に
よる二律背反の曖昧化がそれである。例を挙げよう、しかし正当性はこの限り気にしない。「思考と感情は理性と情動の二律背反であるとされる。だが、感情はある事象への嗚咽に似た反応であって、ここには理性、即ち思考が働かなければならない。なぜなれば、事象の認識と認識に対する反応という思考的作用を有するからである。或いは、思考は感情によって合理性が掻き乱される可能性が付きまとう。よって感情は思考に介入するスペース（空白）が必ず存在する。よって一方は他方を含み、他方はまた一方を含む」と。このように、推論＝連想規則は二律背反の一方に導く力を持っている。だがこれでは普遍性に欠けている。ジャック＝デリダは無論あらゆる二律背反を検証したわけではない。そして、私はこの証明を確信していない。比喩或いはそれ未満の現象として提示した。

第五節意識されるもの以外存在しないという凡そ先験的な観念

この節では、主に現代言語学的な記号論についての批判をやってみよう。さて、予てから、というのも人類が知的作業を営み始めてから、
論的体系の構築を困難にする事実がめぐりまわっていた。それというのも、理論の成否を握っている検討の場から取り出す、どんな事実も視認される限りの事実なのであって、或いは最も簡単な事実に見えても、ある複雑な思考の迂路を辿って初めて到れるところの極めて込み入ったものであるかもしれない。この事態は稀ではない。しかし、注意深く観察すればこの事態に気づくはずである。人はこの事態を踏み誤る。すれば現事態からの解脱を振りかけることは価値のある行為と見なされるわけだ。ひとつ、ここに命題がある、「言語は存在を造る」と。

第二章酩酊の弁証法

第一節酩酊の狂気なしには如何なる台架も存在しない

これから私が述べることを決して真に受けないこと。そして、この言説に余計なことは言うまい。私の想うところの方途が全く特殊で、偏に階層的な筋を意味するものでないことは言ってよいだろう。本節の叙述は、極めて慎重に行わなければならない。教える、ないしは描き出すという作業によって、本質が潜在化し、透明度を増すことを私は知っているからだ。ちょうど、任意性のカリギュラ効果ともいうべき問題に法を導入する営みに等しい。真に放った一言が即ち嘘となり、嘘は永劫に嘘である。と言っても、私は“酩酊の弁証法”を真に了解しているわけでもなければ、必要な時、或いは発揮すべき時にこそ使用できないのであって、私自身この弁証法に抱擁されている。ゆえに、彼の外観を見ることができない。そこで、示唆的と想われる暗号として私の前著を引用し、その解釈に一定の向きを与えることを、まず試みよう。しかし、私の述べるところを決して“真に受けてはならない“。その上で開始せねばならぬので、叙述に憧憬を持つ余裕を破壊するため、この書物の”符号化”を溶かすべきだ。ではどうすればよいか？それは読者諸君が克服しなければならない事情である。だから知らないといって放り出すのは無責任なので、ここでひとつ有用と考えられるものを提示しておく。符号化は、離反されたものから生じる。エクリチュール、即ち死んだパロール。パロールを蘇生させればよい。それも、信用のおけない新米の、熱情のみが先走って判断を下す、直情的な鋭敏主義者のパロールであ

る。如何にも、この節或いは本書はその若き青年の声である。文字はあなたに語りかける。どうした、仕事はうまくやっているか。小生意気であればあるほど、あなたは恨みを募らせ、何たる無礼な若造が、お前の無根拠な発言には常に空腹感がある、無なのだ、と判断する。これが即ち本質である。或いはこの文章を書いている人物像を想像してもよいであろう。ああ、批判すべき点は何を以て、本書或いは少なくとも本節を口語などの親近的な言葉で綴らなかったのかということだろう。ここに理由はない、言い訳ならできるが。中世の学術書がラテン語で書かれていたのと同じ理由だと、口実を設けておこう。
さて、前著が意味不明に書かれていたことについて、理由はこれない。また意図してああ書いたわけではない、本気（マジ）であったはずだ。

第二節現代思想は狂気を覆う

現代思

第三部精神構造論の述語

第一章エベラとはなにか

第一節酩酊の弁証法との関係からみたエベラ

わたしの精神構造論＝エベラは、

第五部架空のセミネール

これから述べる実際性を盛られた如何なる出来事や事件、人物、建物、動物をも私の想像から生じた架空である。

第一章オスロ編

第一節はじめに

みなさん！私はこれから、もっともすぐれた、人間の心的特質に対する分類法はなにかというテーマで語ろうと想います。いわゆる早とち
りだとか、意地っ張りだとか、陰気くさいだとか、ずば抜けて明るいだとかいった、俗に言う「性格」についてです。近ごろ、エベラは現実から凡そ到達不可能な難解な抽象理論であると見做されていますが、このような身近なテーマによって、さる誤解を解くことができると考えるからです。またそれにより私や、或いは総ての人間の思考は言葉とは言わないが、必ず現実の意識的な事件に立脚しなければならないのですから、エベラを現実（或いは俗なる界）に引き留めておくことができるでしょう。私たちは、私たちから離反した如何なるものをも、「難解」という呼称や敬意や礼儀によって賄います。事実、オスロ出身の経済学者R・G・ゴールゾックは、これを逆手にとって巧みな論文を書き上げまし

た、これは凡そ最近の事件でありましょう。彼はもともと文章の魔術師、即ち作家であって、その技巧的で魅力的な小説も存在します。彼は神秘的な筆運びによって、ご存知の通り老アルフレッド・レクリパートの革命的な真の理論を批判したうえ、その善き部分と彼が決断した箇所を数学的記号計算体系に還元し、或いは彼独自の社会的、経済的観念を織り交ぜ、人々をあらぬ方向へ向かわせ翻弄したのです。人々は、その明晰さと簡潔さゆえ、彼の経済学的演算規則を丸飲みしてしまったのでした。無論、私にさる意図は毛頭ございません。そして、みなさんが懐疑の目を向け、或いはその神秘性に欺かれないよう、エベラの符号化の否定をここで断っておくのがよいと想います。と申しましても私は、エベラが詩的であり、時には彼自身高らかに歌うのだということをも、私は主張したいのです。規格内の理論とは、機械的動作を示唆し、詩的態度と対立します。しかし、ならばその理論は余りにも観察が表面的ではないか、どう取り違えても差し支えないような浅沼な記述に留まってはいないか、と私は問い詰めます。すると、やはりそうであったことが決まって示されます。ゆえ、この講義でも扱うことになる二律背反の他方包含性を考えることになるのです。時に、みなさんは心理テストやら、性格判断やらといった遊戯を楽しんだ経験がおありでしょうか。私はひとつ、子供の頃に、美しい女の子の記憶と絡み合って、その経験があると言えます。幼き頃なので曖昧ですが、フルーセ・ヴィルヴィエ付属学校で出会った仲の良い女の子がいました。彼女は典型的な女の子の道程を逸れ、私や獰猛な私の友人らと、蛙の口から空気を吹き込んでその腹を膨張させたり、我が学校の近くにあった無人の森における王者ブルーヴィー（蛇のような哺乳類で、小さな四肢が長い距離を置いて生じており、動きは俊敏で、噛みつかれると数十日は腫れが引かなかった）を退治したりと、勇敢で明るい少女でした。しかしながら、４年生に上がったころには彼女でさえ、女性的な一面を見せ始めました。そんなある日、昼の休み時間に彼女に呼ばれ、幾つかの分析さながらの質問を受けました。「あなたは階段を上っている。今、何段目にいる？」と聞かれたとき、私はこう答えたのです、「そんなのしらないよ」と。彼女は「そうじゃない、言うの」といい、私はそれを理解せず、「なにを？」。彼女は「あなたがもし階段を上っていたら、今何段目なの？」、私は「わからない」。こんな感じの押し問答を長くやり、遂に彼女はしびれを切らして、「もういいわ、好きな数を言うだけでいいの」と諦めました。私はある数を言ったのですが、その刹那彼女の、押し問答でうんざりした顔が驚いて、「本当に？」といいました。彼女は「その数はあなたの好きなひとの学籍番号なのよ」といいました。すると、私は、ついいましがた言った数字はまさに彼女の学籍番号そのものだったことに気づきました。彼女は顔を輝かせて、「こんなことってあるのかしら！」、私に抱きついたのです！ああ、こんな記憶があります。おっと、随分長くなってしまいました。みなさんはこんな話を聞きにいらっしゃったわけではあるまい。ですが、年齢を積み重ねて今になり、この話を新しい見地から見直してみますと、エベラの限界とも言える神秘の事象に到達します。私は如何にも、この講義でこのことに触れる予定なのです、つまるところ “テレパシーの可能性“についてです。エベラにおいては「パルレ」といいますが、これはマニケーの直接伝達を意味します。そして、傑出分類法はパルレ自体を生成していると考えてもよいのであって、さる分類法の最も主要な世界は、確実に他者に染まることがあるのです。こうしてみますと、フルーセ・ヴィルヴィエ付属学校の彼女と当時の私は、パルレ関係（感情内的結合関係）を有していたのかもしれません。また、心的情緒に関わらず、如何なるマニケーも原理的には他者に開かれているのかもしれない、そうしたならば、これは事件です。情緒は意識的であって、パルレの現実的実体を知覚可能にしますが、マニケーは無意識的単体の場合もあるため、我々の目を逃れているだけの可能性も大いにあります。